

# 教壇実習報告 グループ 3（歴史）

人間文化創成科学研究科 比較社会文化学専攻

染井千佳

## 1. 実習の目的

### 1-1 実習内容の決定まで

日本語教育初期に日本語で日本史の授業をするため、日本史に興味関心を持たせることを第一の目標にした。日本史自体に興味関心の薄い学生である可能性もあったため、日本と韓国の比較研究の形をとった。これは史学そのものを敬遠する学生が多く、学習の機会自体が少ない外国史であるため、学生にとっての自国史を導入に用い、その上で大テーマとなる日本史の授業を行う形を選択したためである。テーマには、日韓比較研究が行われている中世の武人政権を選び、特に武人政権成立以前の状況比較を目的とした。

### 1-2 武人政権と武士政権の比較研究

武人政権と武士政権の比較研究は、近年韓国でも研究が行われ、日本においては村井氏・国際日本文化研究センター主催の国際シンポジウムの成果がある。本分野では日本の鎌倉幕府政権と高麗の崔氏政権が比較研究の対象となり、今回は双方の共通点と相違点に着目した。

二つの政権の特徴を大まかにまとめると、共通点は、①戦士階級の政権であること、②12世紀に成立したこと、③権力の二重構造が挙げられ、相違点は①二つの権力の距離、②軍事編成、③外圧の強弱による社会階層の流動性、の三点が挙げられる。何故このような差異が生じたのか、という疑問に対し、報告者が着目したのは政権成立以前の武士・武人の地位である。特に武人・武士と対立的に捉えられる文人・文士との関係に着目した。

東アジアの価値観では、律令・儒教の影響から文官の地位が相対的に高くなる傾向にある。高麗では文人の地位が圧倒的に優位であり、階層は強固に固定され、厳然たる格差があったと言える。一方、日本では血筋によって職掌が決定されつつあったものの、身分階層は高麗ほど固定されず流動的であり、格差もさほど大きくなかった。故に日本の武士はそれまでの権力機構とは別個の権力機構として幕府を創出し、中世・近世における幕府権力と朝廷権力の二重構造を保持しえた、と考えられる。

## 2. 授業内容

### 2-1 実施について

実習は二月十八日、同徳女子大学にて、参加学生数 16 名で行なった。PP の操作や学生の討論の際には、日本語教育の皆様にも御協力頂いた。

### 2-2 授業内容

授業に入る前に、学生同士でグループを作り、武人・武士のイメージをそれぞれ話し合ってもらい、

学生の知識を確認した。ほとんどの学生の持つイメージは、ドラマや漫画からのイメージであった。その点を踏まえて、授業を行なった。

本来なら、1・2 で述べた論点それぞれについて詳細に検討する必要があるが、関連付けて考察することが重要であろうが、今回は割愛せざるを得なかったため、結論部分の特徴を表していると思われる事例を二つ挙げるにとどまった。

まず、学生にとってより身近であろう韓国史から高麗の事例を引用した。高麗では、900 年成立の後百済・翌年の後高句麗の成立に始まる後三国時代に端を発した戦乱期を通し、936 年王建による高麗建国まで武人が指導者的地位にあった。しかし、統一新羅段階より唐から輸入された律令・儒教が広まっており、既に文人が武人を軽視する傾向が存在した。更に骨品制により出自が重視され、階層の固定を生んだ。高麗政権下では当初こそ武人と文人に差がなかったと考えられるものの、光宗による肅清を含む中央集権化推進とそれに伴う科挙の実施、成宗による両班制度導入により、文・武の格差は大きくなっていった。そして毅宗の時代に、王の近衛兵であった鄭仲夫の罷が、文人の子である金敦中が燃やされるという事件が起き、この事件が庚寅の乱を引き起こした（『高麗史』叛逆伝）。授業では PP を使用して説明した。

続いて、日本史から平将門を取り上げた。将門の本拠地は常陸・両総であり、朝廷のある京都からは距離的にも離れている。また将門は桓武天皇の子孫であることを意識し、朝廷とは別個の権力構造を考えていた、と考えられる描写が乱後に成立した『将門記』に見えるなど、武士政権成立以前の武士が朝廷とは別に独自の権力構造を創出させるという独立意識を持っていることの早い事例だと言える。また貴族社会に与えた影響は凄まじく、のちに源頼朝の蜂起や強訴などが起きた際に、その様子を将門になぞらえるなどといった事例が幾つもある。貴族社会への影響には、同時期に藤原純友が西国で反乱を起こしている点も重要である。更に、将門以降の内乱によって形成されていく武士の意識にも留意が必要である。特に同じ軍記物である『保元物語』『平治物語』からは、東国の独立意識を読み取ることが出来る。更に将門の追討には平貞盛・藤原秀郷が直接に関わっている他、源経基も関係している点も重要である。何故ならこの三人は、中世武士団の祖として仰がれることの多い人物であるからである。特に経基は鎌倉幕府を作った清和源氏の祖にあたり、のちの武士政権を考える上では見逃すことの出来ない人物と言える。しかし今回は将門のみに事例を絞り、

平貞盛・藤原秀郷の子孫が武士になることを述べるにとどまった。授業では鄭仲夫同様、PPを使用して事件の経過を述べた。

最後に、二つの事件を通して文武の関係のみを結論としてまとめ、授業を終了した。

### 3. 学習者の感想

予想されていたことであるが、歴史の授業と言うだけで苦手意識を持つ学生が多かった。また冒頭の討論でも明らかになったように、「武人」や「武士」のイメージがドラマ等のメディアによるものであり、特に日本史を勉強していた学生は少なく、また韓国史についてもあまり記憶にないと書いた学生も見受けられるなど、歴史学そのものへの関心が低いようだった。また歴史であるだけで話が難しいと感じる学生が多かった。

一方で説明に用いた PP は好評で、アンケートにも多くの意見が出た。解りやすさ、関心を引き付けることの二点は PP によって達成されたと考えて良いと思う。

また授業の最初と最後に学生にグループを作り、武士と武人のイメージ／授業内容の討論の場を設けた。最期に授業を振り返ることで、内容をより深く考察することが出来たようだった。

授業自体は学生には概ね好評であるようであった。

### 4. ゼミでの討論内容

ジョイントゼミではテーマ設定の是非が問われた。生活史が良いのではないかとのことであったが、日本古代史においては史料の少なさから、生活史は未だ困難な分野の一つである。交流史（外交史）との言葉もあったが、その分野は日韓の歴史学で最も研究が盛んな分野であり、教科書等に多く取り上げられているので、今回はテーマとして設定しなかった。今回のテーマは昨今両国で盛んになりつつある研究

分野を選択したが、あまり日本史に触れていない学生にとっては馴染みが薄い分野であったようだ。

次に外国で歴史学を教えることの意味と方法を問われた。日本人が外国史を学ぶ時も、日本史を学ぶ時も、方法は史料を読んでの実証であることに変わりはない。外国史の場合は言葉の壁があるが、東アジアの公用語は漢字であったので、古代の史料に限れば日中韓の間にある壁は西洋史などに比べて低い。しかしながら現在の日本人が漢文や混淆文を難しいと感じるように、ハングルに慣れた韓国の学生にも漢文が難しい。故に史料を用いて実証することを非常に難しく感じる。史料を読まずに実証出来ないのが文献史学である。今回は授業内で史料を用いることが出来ず、単なるエピソード紹介にとどまった。これでは「専門的な日本史の勉強」とは到底言えない。単なる講談である。批判を受けて然るべき授業であったと認めざるを得ない。

### 5. 感想

日本語学習の初期において日本語で日本史を教えることには相当な困難が伴う。報告者が外国語に不自由であることもあろうが、通じるであろうと思う用語が全く通じない。また言語や文化以上に学問の壁を感じた。

### 参考文献

- マルク・ブロック『比較史の方法』、創文社、1978
- 村井章介『中世日本の内と外』、筑摩書房、1999
- 笠谷和比古編『国際シンポジウム公家と武家の比較文明史』、思文閣、2005
- 川尻秋生『戦争の日本史4 平将門の乱』吉川弘文館、2007。
- 高橋昌明「東アジアの武人政権」（歴史学研究会・日本史研究会編『日本史講座』3所収、東京大学出版会、2004）

### 実習教材



